

凍った時間、流通の夢

島田 裕巳

広瀬 洋子

橋爪大三郎

(しまだ ひろみ・放送教育開発センター助教授)
(ひろせ ようこ・放送教育開発センター助手)
(はしづめ だいさぶろう・社会学者)

生物としての人間にとって、「種の保存」は最も重要な課題である。食欲と性欲とが、人間の基本的な欲求とされるのも、この二つの欲求を満足させることが種の保存へと結びついていくからである。社会が近代化され、高度な産業化が進んだとしても、それは二つの欲求をどういった形で合理的に満たしていくかという方向性を持っている。

食物に不自由しない状態、後継となる子供に恵まれ、それがすこやかに育っていくことを、人類は永く願ってきた。もし、そういった領域にも科学技術を応用することが出来るなら、それを利用してみたいと考えても無理はない。私たちは、今そういった局面に向かい合っている。食物にしても、子供にしても、それは生きた生命の問題として関わってくる。生命のコントロールは、危険な部分を含んでいる。しかし、私たちはそういった領域にすでに大きく踏み込んでいるのである。

1. 流通の夢

ばらばらな小集団から出発した人類は、農業革命、産業革命を経て、今日全地球的な広がりを持った単一の共同社会を営むに至っている。その共同社会においては、すべての人間がすべての人間に依存し、その依存の度合いは、ますます高まっている。これほど大勢の、見ず知らずの人間同士を結び付けているのは、情報の流

れ(コミュニケーション)であり、物財の流れ(流通)である。どちらの流れが滞ったとしても、現代社会はその機能を停止する。そして、このどちらの流れも、技術の急速な進展と足並をそろえて、日に日に迅速、濃密、かつ大量のものになっている。

コミュニケーションの理想がそうであるように、流通の理想は、時間と空間を越えて、任意の誰でもが任意の誰でもと結びつくことである。それはおそらく、富の究極の在り方であろう。この夢が叶うなら、人間は無尽蔵の富を一身に享受できるとさえ言えよう。

空間をどこまで克服できるかは、相当程度、エネルギーの問題にかかっている。流通に要するエネルギー・コストが十分に小さいなら、遠方にある物財も、手近にあるのと同様に利用することができる。これに対して、時間の克服は容易ではない。時間の流れは一方向で、逆転できない。それに、時間の経過は流通にとってやっかいな問題を引き起こす。時間がたつにつれて、物財、その中でも特に「なまもの」は変質をまぬかれないからである。

ところがここに、ささやかだが重大な変化の兆しが見えてきた。「なまもの」の冷凍技術の発達である。さらに、冷凍された「なまもの」を上手に解凍する機能を持つ電子レンジが急速な勢いで家庭に普及している。それは、食品の流通や人々の購買行動、ひいてはライフ・スタイルを一新するだけでなく、もっと大きな社会

変化の先触れですらある。

冷凍技術は、細胞を破壊することなく、鮮度を保ったままの保存を可能にする。そして、この技術は、じつに生命工学(特に生殖革命)を支えているのと同様の技術なのである。共通の技術が使われる背景には、人類に共通な問題意識がある。それが時間の克服という課題であり、冷凍技術には人類が時間を支配し、克服し、時間を越えて互いに関係しあうようになる新たな可能性が秘められている。

この変化の奥行を探るために、私たちはまず、生殖革命の動向を、次に、急速に進みつつある食卓革命の実際をつぶさに考えてゆくとしよう。その上で、これからの人類史の行く末を望見してみたいと思う。

2. 凍った生命

ちょうど今から10年前の1978年7月、世界で初めての試験管ベビーがイギリスで誕生した。あらかじめ両親から採取しておいた卵子と精子を試験管の中で受精させ、それを母親の子宮に着床させる。この高度に発展した生殖技術は、従来は分離不可能だった生殖のプロセスを、卵子と精子の採取、受精、子宮への着床という段階に分離し、人為的な操作を可能とするものであった。こうして神聖な営みとされてきた生殖は、分業可能な生産過程に解体されることとなったのである。

試験管ベビーが誕生するためには、一連の生殖のプロセスのうちで、二つの部分をコントロールすることが不可欠であった。一つは、受精の段階であり、両親から採取された卵子と精子を試験管内で受精させる体外受精の技術が確立されていなければならなかった。そして、もう一つには、母親の側のホルモンのサイクルのコントロールが必要であった。女性の身体には、月経が来て、排卵があり、妊娠しないと子宮内膜がはがれ、次の月経を迎えるというほぼ一カ月のサイクルが備わっている。このサイクルは、

脳下垂体の命令で卵巣から出される二種類のホルモンが司っている。人工的に排卵を促したり、子宮を受精卵が着床しやすい状態にするためには、そのホルモンの状態が適切にコントロールできなければならないのである。

ただ難しいのはタイミングであった。精子の受精能力は約24時間、卵子の場合には48時間である。体外受精と子宮への着床がうまく行なわれるためには、材料となる精子と卵子の鮮度が重要であった。母体のホルモンの状態にあわせて、必要な時に必要なだけの精子と卵子を手に入れなければならない。これは決して容易なことではなかった。男性の精子と違って、女性の排卵は通常でも一か月か二か月に一回、しかも卵子は一回に一個しか排出されない。たとえ五つ子で有名になった排卵誘発剤を利用したとしても、その数は五つにしかならない。しかも現状では、卵子を採取するに当たっては、腹部に穴をあけ、卵巣から卵子を吸い上げることになり、それには全身麻酔を要する手術が必要となる。時間とコストがかかる上に、肉体へのリスクも少なくない。そんな手術を何回も繰り返すわけにはいかない。

必要な時に、必要なだけ、新鮮な精子と受精卵が手に入ったら。その鍵を握るのが、精子や受精卵の冷凍技術であった。人間の精子の冷凍保存が成功したのは1954年であり、1970年代にはアメリカで精子銀行が登場し、主に人工受精に使われるようになった。卵子の冷凍保存が遅れたのは、卵子の組織が急速な冷凍では損傷が著しいからで、研究者たちは苦心惨憺の末に、卵子さらには受精卵の冷凍保存技術を開発していった。1983年、オーストラリアで冷凍保存した受精卵を子宮に着床させるのに世界で初めて成功する。受精卵の冷凍保存は、不妊治療に都合がいい。排卵誘発剤の使用時にできる複数の卵子を一時期に受精させ、それを冷凍保存させておけば、母体の状態のいい時に子宮に着床させれば良いことになる。我国でも、産婦人科学会は1988年2月、冷凍保存した体外受精卵の臨床

応用を認める見解を発表している。こういった冷凍保存技術の確立は、体外受精に最後の望みを託す女性たちにはまさに「福音」であった。この技術ぬきには体外受精の一般的な普及は考えられないとさえ言える。

というのも、オーストラリアの場合でさえ体外受精の成功する割合は平均で3分の1、さらに受精卵の子宮への着床が成功するのは全体の7分の1にしか過ぎないからである。よほどの幸運に恵まれない限り、数回の試みで体外受精が成功することはありえない。だからこそ、受精卵の冷凍保存が是非とも必要だったのである。

さらに体外受精は、高齢出産の問題とからんでくる。体外受精の手段に訴える女性は、それが最後の手段であるために、自ずと年齢が高くなる。ところが高齢出産には異常児の生まれる危険がともなう。その第一の要因が卵子の衰えに求められるのである。女性は誕生した時、すでに小さな卵巣の中に一定の卵子の細胞を持っている。月経が始まると、一カ月か二カ月に一度位ずつ卵子は成熟して、卵巣から卵管に転がり出てくる。仕事の事情などで、出産の時期を遅らせたいと考えた場合、なるべく若い時に自分の卵子あるいは配偶者との受精卵を冷凍保存しておけば、受胎の時期を選ぶことができ、しかも元気な受精卵を利用することによって、異常児を生む危険を回避することができるかもしれない。

体外受精を経て冷凍された受精卵は、そっと病院の冷凍庫の中にしまわれる。その受精卵の「母親」は、冷凍庫の置かれた部屋のドアの前にたたずみ、そっとささやく。「待ってて、私の可愛い赤ちゃん。いつか必ず貴方を身籠もってあげるから」

私たちは、そんな場面を想像する。わずか10年の間に目覚ましい進歩を生産技術は遂げてきた。子を生む過程がいくつかの段階に分離されることで、自然に委ねられていた性の領域が人為による操作の対象となっていく。先端的な医療の分野では、こういった性、生殖ばかりでな

く、人間の生命活動全体がその対象となり、様々な技術が開発されてきている。遺伝子のスクリーニングによって遺伝病遺伝子の保因者を胎児の段階で発見したりすることや、臓器移植がそれに当たる。こういった技術の開発によって、生命の操作さらには生命の「品質管理」が可能となっていく。もちろん、先端医療技術への反発は根強い。生殖技術の応用に関する倫理の問題が社会的な議論になっている。例えば、代理母についての訴訟は、「受精卵の母」と「子宮の母」との争いである。生みの母が実母であるという観念すら揺らいでいる。

私たちは、この生殖革命の中から、生命のコントロールを行なう上で、どういった問題があり、技術開発を進める上で何がポイントになるかを知ることができる。冷凍技術が重要な意味を持っているのは、タイミング(「時期」)が問題になるからだ。母体の状態にあわせて受精のタイミングを選ぶ。生命はそれほど微妙な働きをする。受精卵を冷凍することによって時間をコントロールする。生命の冷凍技術は時間と深く関わっている。そして、そこまで進んだ高度な技術開発の現状は、食卓へと通じていく。

3. 時間の冷凍

「生命の操作」、その言葉自体が私たちを不安にさせる。神を信じるなら、それを神への冒瀆と呼ぶことはできる。神によって与えられた生命を冒してはならない。神への信仰が倫理を生み、生命の操作を許さない。しかし、もし私たちが神を信じないとしたら、生命の操作を妨げる根拠をどこに求めたらいいのだろうか。倫理なき世界に生きる者は、そう自問する。

第一、このことが人間の生命に関わらないとしたら、どうなのだろうか。すでに、人間は他の生物の生命を操作してきた長い歴史を持っている。品種改良は古代から繰り返されてきたし、家畜の改良は、食糧その他の確保のために積極的に奨励されたきた。生殖革命において用いら

れている技術も、もとをたどれば乳牛の安定した生産のために確立されてきた技術である。そこには、倫理の問題は発生しない。たとえ、ヒョウとライオンを掛け合わせてレオポンを作り出しても、倫理的な非難はそれほど強いものではない。倫理学はあくまで「人間の学としての倫理学」なのである。乳牛に許されることは、人間には許されないのだろうか。

さらに言えば、私たちの日常の暮らしの中に、生き物を冷凍させる技術は深く浸透してきている。生き物という表現は、適切でないかもしれない。「なまもの」という言葉を使うべきかもしれない。私たちが、今、日々の暮らしの中で食べている食料品に冷凍技術は広範に利用されている。わざわざ「冷凍食品」という言葉を使う必要がない程、冷凍された食品、「なまもの」は、増えているのである。

もちろん、すべての食品が冷凍されるわけではない。また、一口に冷凍食品といっても、そこには素材としての食品から、調理された食品まで加工の形態は多様である。しかし、冷凍技術が最も威力を発揮するのは、「なまもの」を扱った時ではないだろうか。死んですぐ、あるいは生きたまま冷凍が行われる。それは生に限り無く近い死の状態である。人間に譬えてみれば、脳死状態にある人体に相当するのかもしれない。生と死の不分明の時点で冷凍された「なまもの」は、必要な時に解凍され、料理として食卓に供される。冷凍された鯛が、解凍されて生き返るわけではない。しかし、解凍された鯛は、刺身となって、私たちの口に入る。私たちは、その鯛を生きた鯛と極めて近いものとして賞味する。

こうして私たちは、山奥の旅館においても、海の魚の刺身を食することができる。そこには冷凍の技術自体の進歩が関わっている。食品の組織を傷めることなく冷凍し解凍できなければ、食品としての品質は保証されない。かつての冷凍食品には、「まずい」というイメージがつきまといっていた。しかし、現在の冷凍食品には、時に冷凍されていない食品よりも質的に勝ってい

るものさえ存在する。それは、最もふさわしい「時期」を選んで冷凍されているからであり、食品の質的なコントロールがなされている。

また、冷凍技術に関して、近年の大きな発展は電子レンジの改良と普及によって起こったものである。今や電子レンジは家電製品の一つの大きな目玉として、各家庭に普及し、その普及率はアメリカとともに60%を越えている。しかも、機能に応じて製品が多様化し、暖めるだけの単機能のものから、トースター・レンジ、さらにはオープン・レンジの機能を持つものまで、電気店の棚を賑わしている。その電子レンジの機能の一つに「生解凍」というものがあるが、これはまさに「なまもの」を上手に解凍するために開発された機能なのである。凍ったマグロは、この生解凍によって「なまもの」として生き返る。しかも、冷蔵庫や室内での面倒な解凍の作業がない分だけ煩わしさから解放されたのであり、時間は大幅に節約された。すきやき肉を冷凍庫から下ろし忘れたために、空腹のまま、包丁で氷の塊と格闘して指を切ってしまうといったことも、今ではない。

いつでも欲しい時に、欲しいものが食卓に並ぶ。昔は到底考えられなかった贅沢を、私たちは享受しているようにみえる。しかし、そこには食品の冷凍と解凍を求める社会的な需要が関わっていることを忘れてはならない。私たちは、いつでも一家で食卓を囲むことが少なくなってきた。一家全員が同じ時間に夕食をとることはまれなことにさえなっている。子供たちには塾やお稽古ごとがあり、通勤時間の長い父親は、そう早くは家に帰りつかない。母親ですら、パートがあり、会合があり、観劇会があると、夕食時に家にいるとは限らない。それは「個食化」と呼ばれる。母親が作った食事を、各自が電子レンジを使って温め直す。もちろん、作り立てのおいしさはないにしても、冷え切った食事を一人でとる侘しさからは解放されている。さらに、母親が友達と旅行に出掛け、2、3日家を留守にする時には、出発前に調理して、一日分

ずつ冷凍されていることさえある。家庭が変わり、生活のスタイルが変わる。しかし、私たちはそこに依然として暖みを求めているのかもしれない。

あるいは、食卓は空間的に移動する。家の近くにあるファミリー・レストランに一家で車で出掛けていくことが、週に一度全員が食卓をとにもする機会であるのかもしれない。本格的なレストランにはそうめつたには行けない。しかし、ファミリー・レストランなら、それほど出費を覚悟しなくとも、そこそこの食事を楽しむことができる。外食は、かつての「ハレ」の食事の感覚を失ってしまったにしろ、幾分はレジャーとしての感覚を保持している。ファミリー・レストランの各テーブルでは、つかの間の「一家団楽」が演じられている。

こういったファミリー・レストランが成り立ちうるのも、その大きな要因は冷凍技術の発達にある。ファミリー・レストランで使われる食品は、そのレストランのチェーンが保有する農場や牧場で生産される。そこでは必要なだけ生産が行なわれ、完全な生産管理が行なわれている。そして、「なまもの」は冷凍されることで輸送が簡単になる。一定の品質の食品を確保することができるのである。そして、現地で、あるいは別のセンターで調理がほどこされて冷凍され、個々のレストランではそれを解凍して温めればいいだけの状態にされる。レストランの側に優秀なコックがいる必要はない。一定程度の質の料理を、どこのレストランでも同じように味わうことができる。私たちが比較するのは、レストランの間の差異ではなく、チェーンの間の差異なのである。チェーンによっては、手作業の部分を増やすことによって、差異化をはかっているところもある。

冷凍され解凍された食品や料理は、新鮮な材料を使った手づくりの料理にはかなわない。しかし、それは本当の贅沢である。ある程度の質の、しかも一定の質の料理を、いつでも、どこでも、欲しい時に味わえることが可能になった

ことで、私たちは家庭生活の変化になんとかついていくことができるのである。

私たちは、こういった「食卓革命」を通して、確かに何かを失ったのかもしれない。しかし、その反面、何かを得たのではないだろうか。失ったものについては、それを嘆いても仕方がない。私たちは、明らかにその道を選択したのである。あるいは、社会状況が選択せざるをえない状況に私たちを追い込んでいったといえるかもしれない。

では、私たちは何を失ったのか。それは、何が凍っているかを考えることから理解されるのではないだろうか。鯛の例に戻ろう。そこにあるのは確かに、凍った鯛である。凍っているものは鯛に他ならない。しかし、凍っているのはどういった鯛なのだろうか。凍っているのは、腐った鯛でもなければ、新鮮さを失った鯛でもない。最も生きのいい時の鯛である。最も生きのいい瞬間をとらえて冷凍されているのである。つまり、凍っているのは鯛という「物」ではなく、新鮮な瞬間という「時」なのである。一瞬をとらえて凍らすことによって、私たちは時間をコントロールすることができるようになった。長い空間を移動することが出来るのも、時間が凍りついたままだからである。時間のコントロールが、空間を超越することを可能にした。そういえば、生殖革命においてもタイミングが肝腎で、そこでも問題は時間なのである。時間をコントロールすることは、人類にとって長年の夢であった。過ぎていく時を止めることによって、私たちの生の持つつづりやすさを越えることができる。

もちろん、この夢はここでは終わらない。冷凍という手段を媒介せず、消費者に生きたままの鯛を送り届けた方がいい。すでにそういった技術が開発され、仮死状態にした鯛を宅配するようなシステムが出来上がっている。しかし、その恩恵に消費者全体があずかるのはまだ先のことで、冷凍技術はその代替物となっている。一方の極に、生きたままの鯛の宅配システ

ムがあり、もう一つの極に電子レンジ専用の冷凍食品があって、そこには利用される技術やシステムの質の差に応じた食品の階層が出来あがっている。

冷凍技術を利用しての時間のコントロールという試みは、消費者と生産者と流通業者、さらには家電メーカーとの共同作業として行なわれる。冷凍食品が家庭で使われるためには、冷凍冷蔵庫や電子レンジが開発され、家庭に普及していなければならない。冷凍食品よりも鮮度の高い、零度C程度に保たれたチルド食品に対する需要が高まれば、保冷車を使ったチルド輸送の体制が構築されなければならない。時間を凍らすことへの欲望が、生産・流通のシステムを変え、消費行動を変化させていく。

4. 求められた未来

生殖技術の発展、食卓の変化。どちらも、生命としての人間の「再生産」に関係する。その昔、私たちがひもといたマルクスを思い出してみるまでもなく、生命の(再)生産過程は、経済の外に広がる、手付かずの領域である。いや、そのはずだったと言ふべきかもしれない。ところが、今、そうした領域にも、技術的な操作の手が及び始めている。それこそが人類史上の大きな転換なのである。

その転換の意味を理解するためには、ここで、産業革命以来の資本主義の運動を簡単にスケッチしておく必要がある。

資本主義の本質は、一種の組織革命であったように思われる。分業のシステムを作り上げ、それぞれの分業の段階に人を配置する。個々人の労働が有機的に結びつくことによって大量生産が可能となった。この分業=協業のシステムは、利潤の追求を動機として組み立てられている。企業は、その組織内部で機能的な合理性を追求する一方で、市場では企業同士が相互に競争し合いながら、最終的には社会的な合理性、つまりはバランスの最適な状態を実現するもの

であった。封建社会を喰い破って出現したこの資本主義というシステムは、動力(エネルギー)革命をバネとして、飛躍的な発展をとげ始める。産業革命の当初から最近まで、一貫して資本主義の発展を引っ張ってきたのは、生産システムにおける合理性を高めるための努力であった。

生産の領域が、資本によって構成され、組織された結果、社会領域の全体は、生産/流通(市場)/消費の三つの局面に分解される。それにともなつて、企業と家計とも当然分離されることになる。この三つの局面の中では、なんといっても生産の局面が技術的には最もコントロールしやすい。生産の過程は、機械設備と人間労働を機能的に結びつけることによって円滑に動いていく。家庭は労働力を時間単位で企業に売る。企業は、一定の品質の製品を大量かつ安価に生産することに利益を見出す。そのため、いつでも最新の科学技術に注目してそれを活用し、合理的に生産過程を管理し続けなければならない。こうした企業努力は、一種の宿命であり、高度な産業化と技術革新の原動力でもあった。

この生産の過程と比べると、これまで流通の局面には、合理化(科学技術の大規模な導入)は及んでこなかった。まして、消費はなおさらである。消費者一人ひとりの生活の在り方は、決して一律なものでもないし、大量でもない。家計の領域に残された時間、余暇にしか過ぎない。あるいは、市場化することのできない家事労働が家計の領域に残され、愛情や生殖の部分には経済論理が立ち入ることがない。個々の人間は、そういった経済から取り残された時間や、経済の介入しない部分を組み立てることによって自分なりのさきやかな「意味の世界」を作り出していく。少なくとも、そう信じられてきたのである。

ところが、最近では、そうしたいわば古典的な枠組は揺らぎつつある。コンピュータを利用した電磁技術が進展した結果、生産過程のコントロールは、いっそう緻密で繊細なものとなっている。大量生産大量消費の時代は去り、多品

種少量生産の時代へと転換しようとしている。そして、その先に見えるのは注文生産。生産システムは効率を落とさず、柔軟に消費者の需要に対応していくことに活路を見出していかなければならない。それが成功するかどうかは、どこまで優秀な情報処理メカニズムを開発できるかにかかっている。

電磁技術は当面、人間の挙動を模倣することを目指している。コンピュータの特徴はそもそも「万能のものまね機械」(坂村健)だということにある。感覚、状況認知、画像処理、言語理解、熟練した専門家的判断。コンピュータの得意とするのは、そういった分野であり、生産過程の中で期待されているのも、その能力である。

ところで、この種の技術は、生産の局面にとどまらず、流通、消費の局面にも順次波及せずにはおかない。なぜなら、生産メカニズムを高度なものとしていくためには、人間の能力の相当部分をそのメカニズムの中に取り込んでいく必要があるからだ。生産メカニズムの高度化のために利用された技術は、次第に人間の能力を代替できるまでに洗練されていく。それが流通や消費の局面で利用できないはずはない。やがては、生産も消費も、どちらも同一の技術、同一のソフトによって運行し始める可能性がある。生産をコントロールすることも、消費をコントロールすることも、ともに機能的な合理性の追求という点では共通している。そうなれば、次第に生産と消費が異質なものとして対立する根拠が薄弱になっていく。

物財を生産する過程が全面的に自動化・ロボット化していくと、人間労働は主として、生産過程をコントロールしていく方法の部分に集中するようになる。この種の労働は、流れ作業に見られるように機械によってコントロールされる労働ではなく、逆に機械をコントロールしていくという意味で、より「創造的」であり、生産過程に時間的・空間的に縛りつけられる度合いが小さい。労働は、労働以外の、余暇や消費

の領域とますます入りまじり、輪郭があいまいとなっていくだろう。労働時間とそれ以外の時間、あるいは、誰かのための時間と自分のための時間が、水と油のように分離していたのをやめ、おのおのが断片化して、個々人の生活のなかで混りあい始める。金を持つことよりも、自分の自由になる時間をどれだけ持っているかが社会のステイタス・シンボルになるかもしれない。時間は、消費可能な資源として、これまで以上にはっきり意識されるようになるはずだ。そこに、「時間革命」が起こる余地が存在する。

食卓革命は、こうした時間革命の最初の波かもしれない。それは、家庭の内部で調達されていた調理労働が、生産システムによって一箇所で代行され、その生産物(冷凍食品)が流通をへて消費されるようになる、ということの意味する。それはファミリー・レストランの場合も変わらない。その際には、食卓自体が生産と流通のシステムに組み込まれていくのである。かつて、調理された料理は、いわば「なまもの」であり、すぐに変質してしまったから、調理労働は消費の局面に密着せざるをえなかった。冷凍技術は、この密着を解除することで、家事労働の重要な一部分を、市場経済の領域に押しやることに成功した。経済の側自体が家事労働が外部化されてGNPの増大に貢献することを望んでいるからでもある。

純経済学的に見るなら、冷凍食品も従来の商品とかわりないのかもしれない。しかし、この商品に対する需要は、特に「時間の余剰」を人々が求め始めているところから生じている点に注目しなければならない。その延長線上に見えるのは、生産と消費をめぐるもっと大規模な地殻変動——衣・食・住を包括する、電磁技術を活用したホームオートメーション・システムへの志向——なのである。

そもそも、電磁技術自体が時間の冷凍と関わっている。電磁技術は、すべての現象を「情報」としてとらえ、それをデジタル化して蓄積する。膨大な量の文字や数字が小さなマイクロプロセ

ッサの中のためにこまれ、瞬時にアクセスすることが可能である。データベースの検索に見られるように、これまで莫大な時間と労力をかけていた作業が、わずかなデスクワークによって処理されている。欲しい時に、欲しい情報が、瞬時に(リアルタイムに)手に入るようになった。これは、マイクロプロセッサの中で情報の時間が凍っているからこそ、それを「解凍」して、リアルタイムに利用できるのである。現代社会における生活の場面で大量に生産され流されていく情報をどこかで凍らせない限り、ほとんどの情報はただ消えていくしかない。

さらに、生殖革命は、人類の時間構造を大きく変貌させる可能性をはらんでいる。この技術はもともと、家畜のために開発された(だからこそ、最初に受精卵の冷凍に成功したのが牧畜国オーストラリアだったのである)のだが、人間も家畜もともに哺乳類であり、その生体に共通性があったからこそ、人間にも運用可能となったのである。

この技術は現状のままでも、特に女性が自分の時間構造を、自分の好ましい方向に選択することを可能にするだろう。人間は、生物として規定されている要素からできるだけ解放されることを望んできた。人工胎盤による子宮外出産が実現するなどということは夢物語であるとしても、男と女の性別という「自然」から解放されることを確かに望んでいるのである。

人間が「生き物」であることによって、どうしても強いられてしまう部分がある。そこを中心にして、伝統的な消費の領域が構成されていたのではないかと。しかし、冷凍技術は、受精卵や「なまもの」といった生命のいわば周辺部分を人為的にコントロールしていくことに道を開こうとしている。この技術を、私たちはどのような形で社会に織りこんでいこうとしているのであろうか。それは、果たして人類の幸福に結びつくものなのであろうか。現代において、科学技術は単なる技術の問題としては片付けられない。社会を変え、文化を変える力を科学技術

は有している。倫理、道徳、生活習慣、そして思想といった、私たちの生活を支える文化システムの総体が問題とならざるをえない。

食卓革命は、現に私たちを巻き込みつつあり、その勢いを押しとどめられるとは思えない。同じ力学が、生殖革命の恩恵にあずかろうとする多くの人々の熱い視線を生み出しつつあるのではないかと。時間をコントロールすることは古来からの夢であり、食卓と生殖の領域で進行している革命はその夢の実現であるように見える。私たちは、古代の王たちが不老不死を求めておかしな愚行を笑う。しかし、いざ時間をコントロールできる見通しがたったとしたらどうだろうか。その欲望に限界はあるのだろうか。それほどまでに時間への思いには激しいものがある。時間という「監獄」の中から解放されることを私たちは願っているのかもしれない。

時間革命によって、新しい欲望が生まれる。新しい権利が主張され、新しい人生が展開する。家計と企業の分離を前提とした資本主義の古典的なメカニズムも、こうした運動の中で、こうした力学の中で変貌をとげ、新しい段階に進むであろう。

私たちは、今進行しつつある事態が、私たちの夢に発していることを忘れてはならない。時間を凍らせたのは、異星からやってきたエイリアンではない。サイエンス・フィクションを通して夢見てきた事柄が実現したからといって、うろたえてはならない。「眠れる森の美女」にあるように、王子様の一回の口づけで、凍った時間が一瞬にして解けてしまうわけではない。時間を凍らせるという方法、技術は、私たちの生活の中に深く浸透し、生活の合理化に役立っている。そういった冷凍技術によって私たちの生活が大きく変わってしまったからといって、それを一挙に元に戻すことはできないのである。